

ジェンダー視点は「不可欠」

広島で公開講座

転出超過解決策探る



「転出超過の背景にジェンダーの課題がある」と説明する瀬古准教授（奥右）

中区のエソール広島であった。オンラインを含めて約90人が集まり、若者が暮らしたいと思える地域づくりを考えた。

ジェンダー問題に詳しい、広島大の瀬古素子准教授が登壇。内閣府や県の調査結果に触れながら、転出超過の背景を分析した。

地方の女性が東京圏に移り住む理由に、多様な価値観の受け入れや他者の干渉の少なさを挙げたことを紹介。県の調査に回答した県民の約46%が「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく育てた方がよい」とした点も挙げ「空気のように漂っているジェンダーバイ

アス（性別を巡る固定観念）をなくすことが不可欠」と説明した。

瀬古准教授は「暮らしたい場所で暮らすことは憲法で定められた権利。転出は止めるべきではない」として転入増を促す

対策の必要性を訴えた。県内の新入社員や企業担当者によるパネルディスカッションもあった。講座は県男女共同参画財団が男女共同参画週間（23～29日）に合わせて企画した。（高橋寧々）